

# 消費単位の作成—フレイスヒハウタッカーの消費単位の検証—

大阪市立大生活科学 大藪千穂

目的 家計費を世帯間で比較しようとする場合には、世帯の構成員数やその年齢、性などの世帯構成条件の違いや、地域・物価・収入や職業の違いなど、家計費に作用する要因を考慮に入れなければならない。世帯構成条件以外の要因は等質化できるが、世帯構成条件を等質化することは困難である。しかし世帯を構成する、個人の年齢・性にとまなう消費カの違いを単位化した「消費単位」によって家計の比較は容易におこなうことができる。しかし現在理論的に確立された「消費単位」は存在していない。この「消費単位」の歴史の中でも1955年のフレイスヒハウタッカーによる「消費単位」は、それまでの「消費単位」の作成方法を統計的にも理論的にも進めたものとして考えられている。今回は、そのフレイスヒハウタッカーの方法論について検証をおこない、その問題点、及びこれからの「消費単位」の在り方について研究することを目的としている。

方法 分析対象のデータは、「全国消費実態調査(昭和59年)」の大阪府勤労者世帯普通世帯の個別データ1184世帯である。収入は分位、求める「消費単位」も2段階に設定した。収入と消費の関数に半対数形をあてはめ、行列を用いて「消費単位」を算出した。

結果 この方法は食費にしかあてはまらない。しかし食費においても「消費単位」が非常に不安定である。これは行列計算のもつ特性の一つで、このことを考慮しなければ、偶然の結果として算出されたと考えられる数値を「消費単位」として設定することは望ましくない。フレイスヒハウタッカーの方法論は、理論的にはかなり高い水準のものと考えられるが、実際の計算過程には改良すべき問題点があることがわかった。